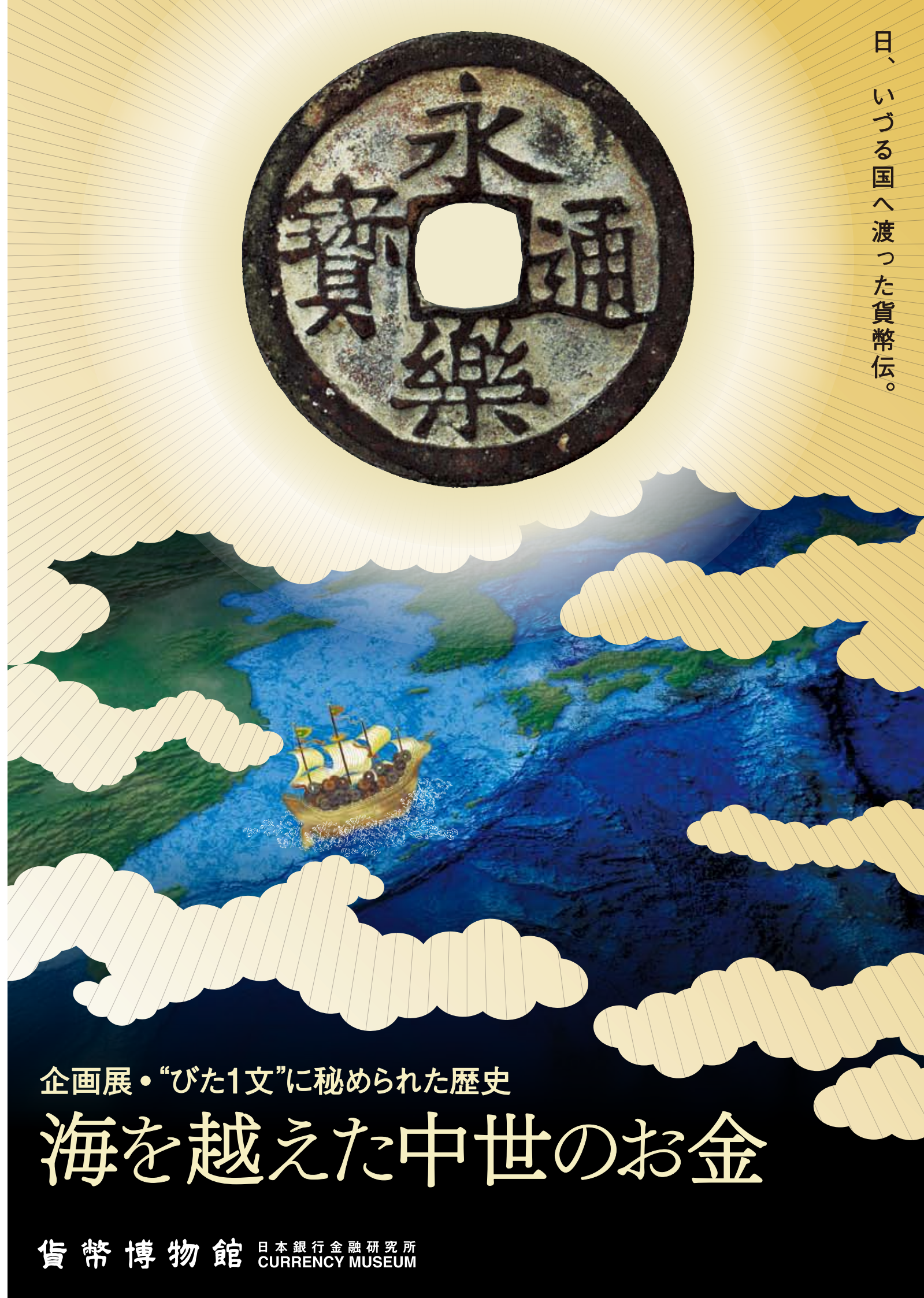


日、いづる国へ渡った貨幣伝。



企画展・“びた1文”に秘められた歴史

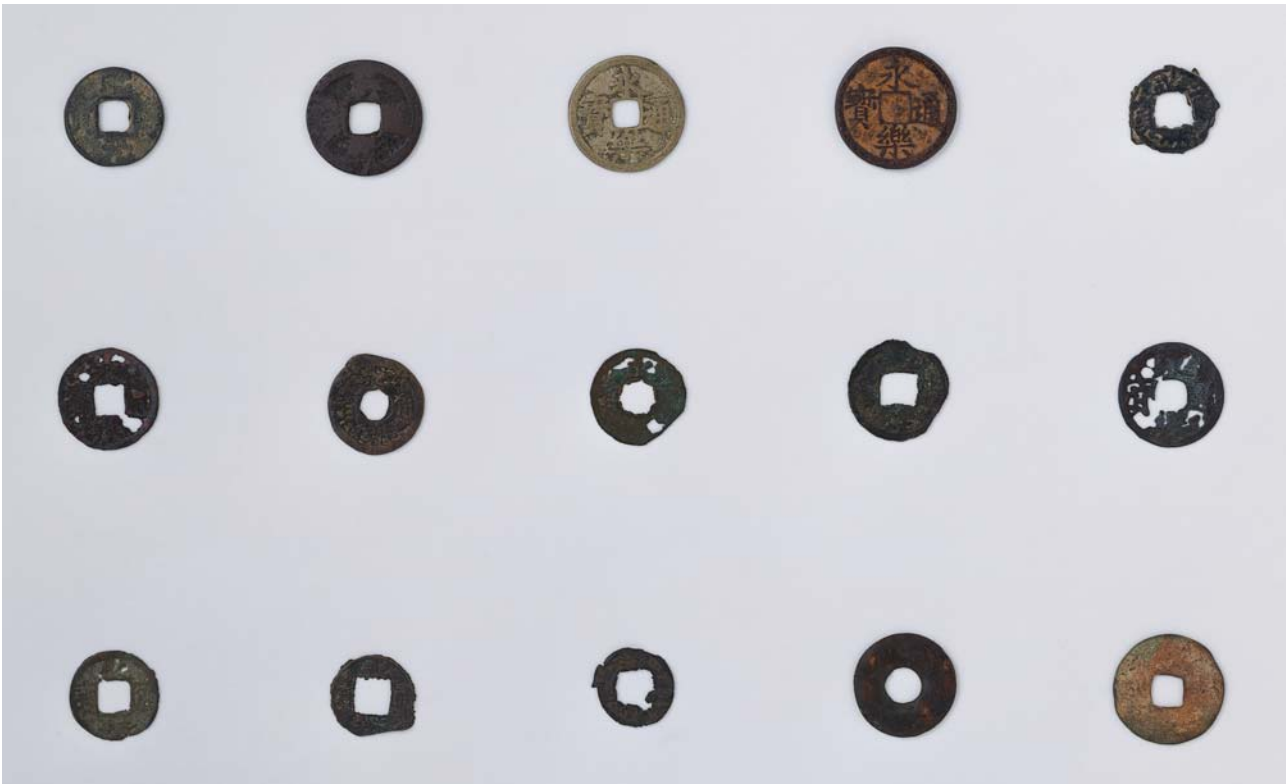
海を越えた中世のお金

日本銀行金融研究所 貨幣博物館 CURRENCY MUSEUM

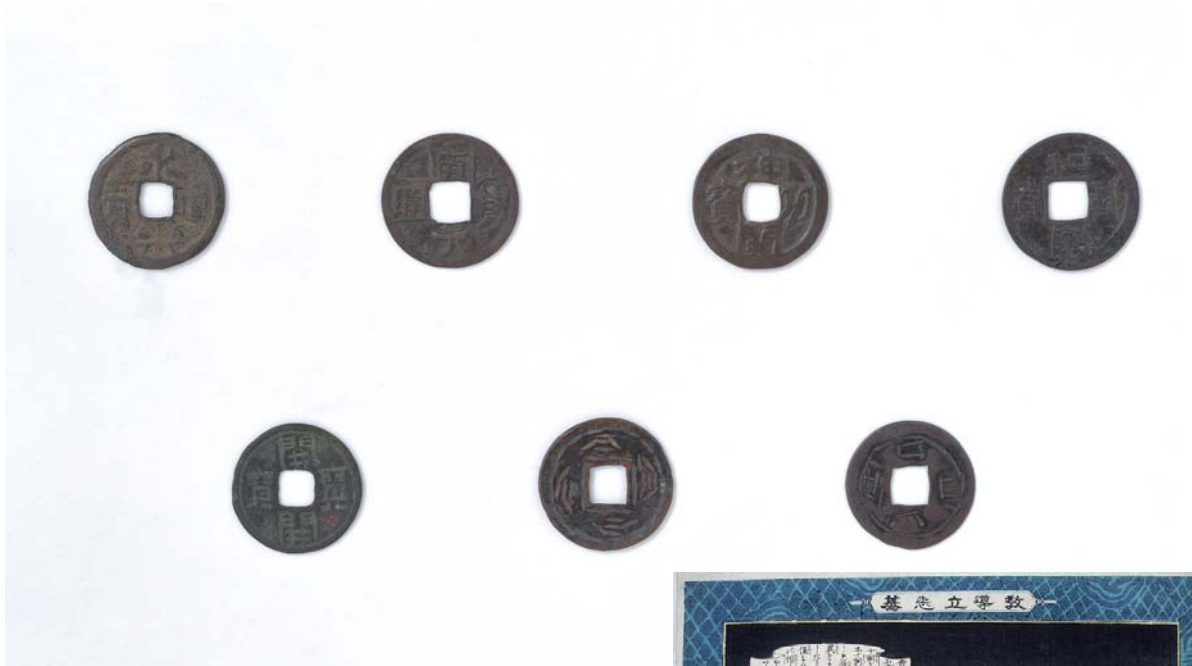
貨幣博物館 日本銀行金融研究所 CURRENCY MUSEUM



口絵1 渡来銭



口絵2 鑄写銭



口絵3 島銭



口絵4 錦絵
「教導立志基 青砥藤綱」



口絵5 鳩目銭



口絵6 石州銀

1 2 3 4



口絵7 石州銀

5 6 7 8



口絵8 甲州金



口絵9 銀錠

3
1 2



口絵10 銀錠

6	7
4	5



8	9
---	---

口絵11 銀錠

ごあいさつ

近年、発掘や古文書などの調査研究の飛躍的な進展により、中世（鎌倉・室町～戦国時代）における銭貨の使用実態が明らかとなってきました。

東アジア世界の中の中世日本では、中国から海を越えて大量の銭貨がもたらされました。そして、渡来した銭貨は人々に広く受け入れられ、それまで年貢として納められていた米や各地の特産物が市で取引される商品に生まれ変わり、貨幣経済が大きな発展を遂げました。

本企画展では、なぜ中国の銭貨が日本に大量に流入し浸透したのか、後に“びた銭”と呼ばれる粗悪な銭貨がどのような影響を及ぼしたのかといった命題に対し、最新の研究成果を踏まえて、読み解いていきます。さらに、石見銀山など戦国大名の鉱山開発によって登場した石州銀や甲州金を含め、中世の貨幣の全貌をご覧いただける展示になっております。

日本や中国など東アジアの貨幣をはじめ当館所蔵の多彩な資料を通し、貨幣が本格的に使われるようになった中世という時代を感じていただければ幸いです。

なお、展示室の奥では企画展の一環として、鉱山開発の様子が描かれた絵巻や16世紀につくられたさまざまな金銀貨をご紹介します。是非この機会に併せてご覧ください。

本企画展開催にあたり、ご協力を賜りました関係各位に心からお礼を申し上げます。

日本銀行金融研究所貨幣博物館

目次

展示内容	2
展示資料リスト.....	45
主要参考文献	46
写真・イラスト提供先、協力機関	見返し

12世紀半ば～13世紀初頭

中国からきたお金—渡来銭のはじまり—

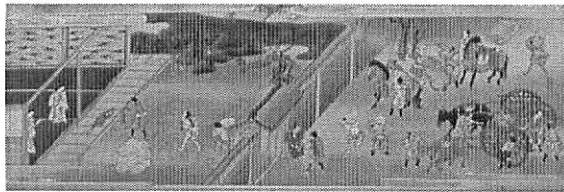
12世紀半ばから中国より銭貨が流入すると、再び銭貨が使用されるようになりましたが、朝廷や鎌倉幕府は銭貨の使用を認めていませんでした。

ただ、12世紀後半の史料のなかで“銭の病”という表現が使われており、銭貨の使用が人々の間で浸透していたことがうかがわれます。



なぜ日本で貨幣を発行しなかったのかな？

中世の日本では、国家が貨幣を発行することはありませんでした。その要因として、国内での銅の産出量の不足や、自国で铸造するよりも中国から輸入したほうがコスト面で勝っていたことなどが考えられています。

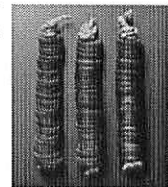


平清盛に寵愛された庶子の屋敷に、米100石と銭100貫の銭箱を牛車で運び込む様子が描かれています。(銭1貫=約1000枚、100貫=約10万枚)

『平家物語』(林房美画)

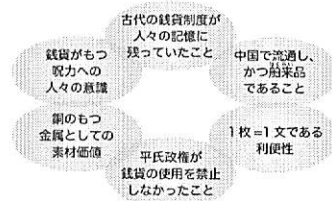
銭貨が受け入れられた理由

銭貨は、誰にとっても1枚=1文の価値でわかりやすく、絹や米等の貨幣のように重さや量を計る必要がありません。また銭貨1枚(小額取引)や銭箱(高額取引)としても使用でき、たいへん便利でした。



銭箱

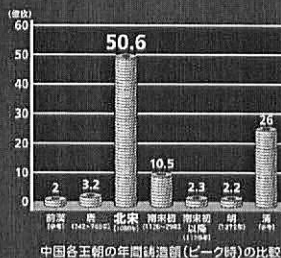
銭貨を葉や麻で作った紐でまとめ、中世では一般的に96～97枚で100文とみなしました。



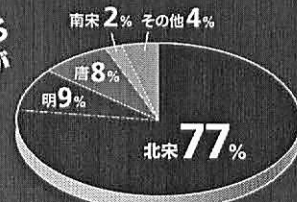
受け入れられた要因

こんなにたくさん!? 中国史上空前! 北宋時代の銭貨鑄造量!

北宋は、中国歴代王朝の中で、最も多くの銭貨を鑄造しました。銭貨を最も鑄造した年の数量を、王朝ごとに比較すると、年間10億枚を超えたのは北宋・南宋初・清のみで、その他の王朝では2～3億枚となっています。



こんなにたくさん!? 日本で出土する銭貨も北宋銭が圧倒!

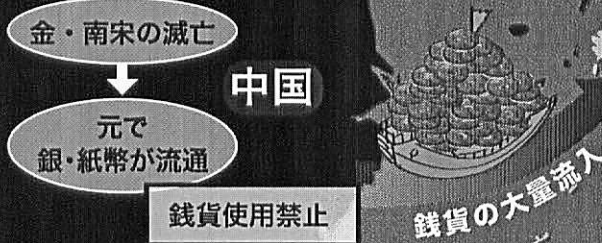


日本の大量出土銭における中国各王朝銭の割合
邦文公認「出土銭の調査」(東京大学出版会・1999)より作成

13世紀前半～14世紀初頭

人々につかわれる銭貨 - 市と流通 -

13世紀には、中国から大量の銭貨が流入し、人々の間で銭貨の使用が一層浸透すると鎌倉幕府や朝廷もその使用を認めました。また、それまで各地の生産物で納められていた年貢は、銭貨で納められるようになりました(代銭納)。そして、生産物は商品として市で取引されるようになり、商品経済が発達しました。



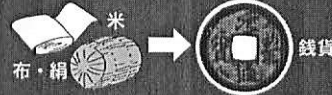
民衆の間で年貢を銭貨で納める動き(代銭納)



鎌倉幕府は、年貢を布から銭貨で納めるよう命じる(1226年)。朝廷も銭貨の使用を認める。



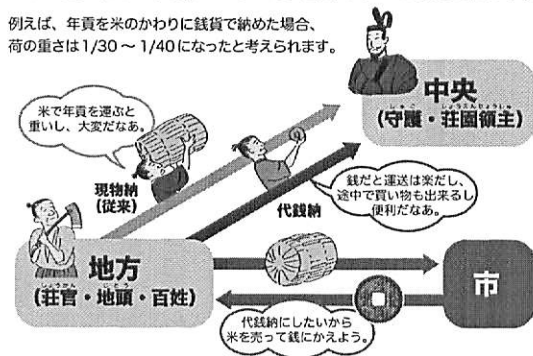
13世紀前半以降 貨幣としての役割が銭貨に集約



なぜ年貢を銭貨で納めたのかな？

人々が年貢を銭貨で納めたのは、生産物で納めるより輸送コストの面ではるかに安かったことが理由の1つと考えられます。

例えば、年貢を米のかわりに銭貨で納めた場合、荷の重さは1/30～1/40になったと考えられます。



市の風景 - 商品経済の発達 -

代銭納の普及により、各地の市では生産物が商品として売買されるようになり、のちに全国規模での商品の流れを生み出しました。

備前国福岡の市の様子

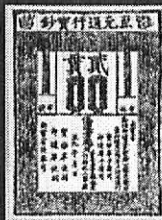


市では、商人や荘官などとの間で銭貨と物資の交換比率(和市)が定められました。和市は需給のバランスや季節や地域によっても変動しました。

商人の中には、権力者や寺社に奉仕し、関銭免除などの特権を得て諸国を移動するものや、営業特権を守るために「座」という同業者集団を結成するものもいました。

銭貨はなぜ日本に運ばれてきたのかな？

12世紀以降、中国では主に紙幣が使用されます。銭貨は紙幣の流通を妨げるとして理由でたびたび使用が禁止され、中国から東アジアの国々へ銭貨が流出する要因となりました。



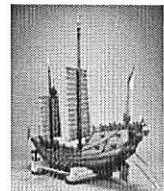
13, 14世紀中国(元)の紙幣 (伊勢から発見したイメージ)

どのように運ばれてきた？

銭貨は、陶磁器・金属器・香木などと共に、貿易船で運ばれてきました。



博多出土の舶来品 (福岡市歴史文化センター蔵)



日元貿易船復元模型 (国立歴史民俗博物館蔵)